

「記憶」のカタチ 「記憶」のチカラ 農村振興の実践のために
Multiplicity and Function of the Reminiscence -For the Promotion of Rural District

山下裕作
YAMASHITA Yusaku

1. はじめに

水田やその周辺施設における生業は水田漁撈に見られるように本来多様であり、それに関する農村住民の「記憶」はまた多種多様である。さらに「記憶」そのものには現代の重い課題である高齢者ケアに資する機能がある。その「記憶」の機能は過疎・高齢化にあえぐ農村地域の振興においても重要かつ基本的な役割を果たしうるものと思われる。本報告では、中国中山間地域における住民参加型地域振興、環境管理活動における「記憶」の機能について検討し、その効果的な活用を地域振興事業の担当者の個人的実践を前提として検討するものである。

2. 「記憶」と地域資源

現在、農村の諸環境から「地域資源」が見いだされ、様々な活動が実践されている。しかしながら、同種の農村同士を比較した場合、本来地域固有であるはずの地域資源が似通ってしまうという印象を持たれることが多いであろう。周知の通り、農村における景観、生活環境、自然環境は地域住民の農業活動や生活活動により構築されたものである。すなわち農村住民の一人一人の「暮らし」により、農村の諸環境は成立している。個々の住民の認識において、農村諸環境は個人的な経験とその積み重ねである「記憶」そのものである。したがって「記憶」とは地域資源を構成する基礎的な要素であり、その「記憶」を集約する地域住民の「生き様」が色濃く反映しているからこそ「地域資源」は固有の資源なのである。

特に高齢住民の「記憶」には、長い暮らしの中で培われた地域の環境評価とその活用のための方法、住民自身の身の丈に合った地域開発の経験、そして地域に固有な住民の合意形成と組織化、すなわち地域意志の決定に関わる重要な要素が内在している。これは内なる「チカラ」であり、地域資源の根幹をなすものである。

3. 農村住民による「記憶」の再認知と地域振興活動

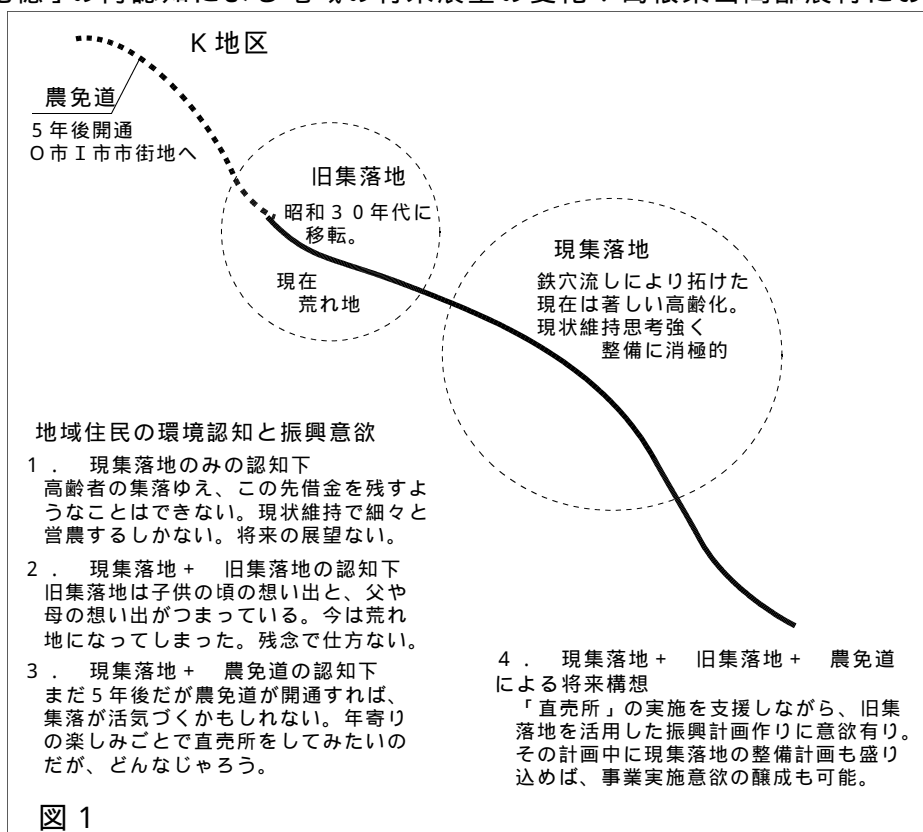
農村地域住民が「記憶」を再認知することにより、地域という現実と向き合う意志が醸成される。そうしてその意志は現実の活動実践のための基本的な原動力となりうる。

【具体的な実践事例の紹介】

中国中山間高冷地における転作小麦作の導入、加工・販売：岡山県・広島県山間部
中国中山間地域において4割にもものぼる減反への対応として、大豆転作が推奨されていた。しかし、大豆は労働強度が高く高齢者の多い地域では必然的に耕作放棄が進展していた。一方、小麦作は気象条件から不可能とされていたが、生業調査による過去の小麦作の

再発見を契機として新たな小麦作とその加工販売を実施し、現在まで6年継続している。

「記憶」の再認知による地域の将来展望の変化：島根県山間部農村における。図参照。



世代間に共通する「記憶」の共有による環境管理活動：

生業調査による「大田植え」に関する「記憶」から、そこで行われた「田植え唄」の意味の伝承。中学校の統廃合により、継続が困難になった伝統行事「田植え囃子」を地域住民全体で維持継続していこうとする意志の醸成、住民組織化。

「田植え囃子」の意味 先祖霊に関連する田の神「サンバイさん」 取水する小河川に田植え時期のタブー「サツキのうちにはサンバイさんがハエゴの背に乗っていんさるからハエゴをとってはいけない」 農業用小河川が祖先神の去来の経路 小河川（川遊び）に関する「記憶」の交流と共有（30才代～70才代）。放置されていた河川の住民による管理活動が今年から始まる。 地域資源として都市農村交流にも活用する意向も。

4. 「記憶」の伝承技術

地域住民に「記憶」を再認知させる方法は、なにより「記憶」を語らせることにある。そのためには民俗学における生業調査の手法が極めて有効である。

生業調査の手法は難しいものではない。ノートと鉛筆さえあればできる。対象者は古老と呼ばれるような特別な住民でなくても構わない。現在、高齢化農村を担う普通の住民の方が、地域振興を目途とする「記憶」の再認知のためには有効である。さらに調査を住民と共同で行えば「記憶」の共有が可能である。また、公民館報や回覧板等による地域的なメディアを使っただけの調査結果の公表は効果的である。

繰り返すが決して難しい手法ではなく、地域住民の共感を得やすく、信頼関係の醸成、地域情報の収集にも有効である。なにより事業・普及の担当者が一人のできる手法である。